

## 古典諸学の基礎としての「原典」研究の課題

古典諸学の基礎としての「原典」班の研究すべき課題は、本領域研究「古典学の再構築」に掲げたもの以外にも多々あり、はなはだ多いと言わなければならない。以下、当初に設定した目的に即して若干の補足を記しておく。

当初に設定した目的の第1で述べたように、各文明における「原典」の状況を調査・把握しその結果を報告して広く研究者等に知らせる課題があるが、それは一つには、厳密な学術的批判に堪えうる精善のテキストを得るため、あるいは校訂を通じてそのようなテキストを作るためである。また、形成された後のテキストだけでなく、テキストの形成・変容の過程それ自体もまた研究の課題とならなければならない。それぞれの「原典」がいつ、いかなる事情・目的の下に、誰によって成書されたか、一時期の単一の層から成るものかそれとも長期にわたる多層の構成物か、などといった問題は、決して単純な問題ではなく、その「原典」の帰属する文明（分野）の基本的性質に関係するからである。そして、以上のような各文明（分野）の相異性に基づく、「原典」の形成の個別性特殊性を解明することと、同時にそれらを横断した全体像を提起することも、我々の課題となるはずである。

当初に設定した目的の第2で述べたように、各文明における「原典」研究を各文明の中で総括するだけでなく、諸文明における諸「原典」研究の総括を相互につき合わせて、古典学の「原典」研究全体に対しても大局的な総括を行うという課題がある。それは、以上のような総括の中から、来たる21世紀の新たな古典学の方向を見出ししていくためである。

当初に設定した目的の第3で述べたように、古典の伝承形態である口承と書写（抄写）についても、個別の各文明（分野）内部的な、およびそれらを跨いだ文明横断的な考察を進めながら、一般的な「原典」形成の理論の確立を目指すという課題がある。

その際、「原典」の伝承のされ方（口承の期間の長短、口承から書写に移るプロセス、個人作者の創作であるかもしくは集団の作品であるか、素人集団であるかもしくは職業集団であるか、等々の問題）や、さらに「原典」の受容のされ方（読む・聴く受容者が誰であるか、どういう場面においてであるか、その教育や学習の形態、等々の問題）等を、それぞれの古典を生んだ文明の特質との関わりにおいて、知識社会学的に具体的かつ詳細に解明する必要がある。古典にさまざまな種類のテキストがあることは、常に研究者の頭を悩ませる問題であるが、そ

のような諸テキストの形成・変容の様相がどうなっているか、形成・変容を促す原因は何であるか等といった問題は、複数の種類のテキストの存在という目に見える物質との関連だけでなく、その裾野に広く広がっている目に見えない世界、すなわち口承・神話・民間説話等との関連においても研究しなければならない課題であると思われる。

（2000年4月20日，加筆・修正）

## バーミヤン渓谷から現れた仏教写本の諸相

松田 和信  
佛教大学教授

### 1 はじめに

今世紀初頭、英国のスタイン、フランスのペリオ、ドイツのグリユンヴェーデル、我が国の大谷探検隊を始めとする各国の探検隊は競って中央アジアへ足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡を発掘し、様々な言語で書かれた膨大な量の出土文献を持ち帰った。またこれらの探検隊とは別に、英国のパウアー大尉、英国のインド学者ヘルンレ、ロシアのカシュガル駐在総領事ペトロフスキーといった人々も、インドあるいは中央アジア赴任中に土地の人たちが持ち込んだ出土文献を直接あるいは間接に買い集めた。そしてそれらの文献は、その後の仏教研究に大きな影響を与えることになった。発見された資料のほとんどは断簡にすぎなかったが、既に失われたと思われていた数々の重要文献の原典がその姿を現したからである。

ところで、このような中央アジアにおける発見がその後も続いたわけではない。1931年に現在のインド・パキスタン間の国境紛争地帯に位置するギルギットの仏塔跡から発見された約3000葉の樺皮写本（紙写本を一部含む）、いわゆる「ギルギット写本（Gilgit Manuscripts）」を最後に、探検ブームが去り、あるいは世界情勢の変化等により、その後例外的に少数の写本発見の報はあったが、大規模な発見は今後もはや望むべくもないものと思われていた。

しかし、この数年の間に状況は劇的に変化した。旧ソ

ビエトのアフガニスタン介入と、それに続いて現在に至るアフガン内戦は、現地の荒廃と引き換えに、世界の古写本マーケットに膨大なアフガニスタンおよびパキスタン出土文献の流入という皮肉な結果をもたらしたのである。マーケットに現れた写本類の大部分は最終的に欧米の研究機関あるいはコレクターに引き取られて行った、あるいは現在行きつつある。

## 2 ノルウェーのスコイエン・コレクション

さてそのような状況の中、今から数年前、正確な場所は伝えられていないが、アフガニスタンのバーミヤン渓谷北部の洞窟の中で、原理主義勢力に追われたアフガン難民によって大量の仏教写本が発見された。それは入り口がひとつ、内部が数本に分かれた自然の洞窟で、一本の奥まったところに仏像が安置され、周囲に写本が散乱していたらしい。写本は分割されてパキスタンからドバイに持ち出され、さらにロンドンの複数の仲介業者を経て、最終的にそのほとんどはノルウェーの蒐集家マーティン・スコイエン (Martin Schøyen) 氏に引き取られた。貝葉 (ターラ椰子の葉)、樺皮 (白樺の樹皮)、動物の皮が用紙として用いられた写本類は、使用された文字から判断して、紀元2世紀から8世紀に遡り、大部分は破損した断簡であったが、サンスクリット (梵語) あるいはガンダーラ語の仏典が書写され、その総量は微小破片も含めて1万点以上にのぼった。

コレクターのマーティン・スコイエン氏は、父親から受け継いだノルウェーの大きな企業グループの会長を務める傍ら、オスロ南方の田舎町スピッケスタッド郊外の山荘でノルウェーの伝統に浸った質素な生活を送りつつ、古今東西の文字資料の蒐集を続けている。なお仏教文献は氏のコレクションのほんの一部にすぎず、その中心はメソポタミアの粘土板、エジプトのヒエログリフ、ギリシャ語パピルス、コプト語パピルス、死海文書といった類である。

スコイエン氏の情報を入手した筆者は、1997年11月、オスロ大学のイェンス・ブロールヴィック (Jens Braarvig) 教授、ミュンヘン大学のイェンス・ウヴェ・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) 教授、ベルリン・インド美術館の学芸員ローレ・ザンダー (Lore Sander) 博士と4人でスコイエン氏の山荘を訪ね、氏から許可を得て共同研究を開始した。

これまでに我々は、すでに三度スコイエン氏の山荘を訪れて調査を行っているが、予備的研究の結果、さまざまな重要文献の存在が明らかとなった。その中には、カローシュティー文字で貝葉に書写されたガンダーラ語の

『大般涅槃經 (Mahāparinirvāṇasūtra)』(2世紀) あるいは同じく貝葉にクシャーナ文字で書写された『八千頌般若經 (Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)』(2世紀-3世紀) の断簡といった、思いもよぬ文献が見い出された。前者はいわゆるブツダ最後の旅路を記した小乗涅槃經のことであるが、いずれの漢訳にも一致しない未知のヴァージョンであった。後者は般若經典類を代表する文献であるが、7世紀以降の般若經写本に見られるような梵語ではなく、俗語で書かれている。2世紀から3世紀といえればインドにおける般若經の成立とそう遠く離れていないであろう。般若經が最初から梵語で書かれていたのではなく、それに先立って俗語の般若經がインドに存在していた直接の証拠が初めて現れたのである。しかもこれは現存最古の大乗仏典の写本である。クシャーナ文字による大乗仏典の写本など、これまでだれも聞いたことがなかった。

さらに我が国でも著名な如来蔵・仏性思想を説く『勝鬘經 (Śrīmālādevīsīṃhanādanirdeśa)』、さらに『阿闍世王經 (Ajātaśatrukaukṛtyavinodanā)』、また漢訳では鳩摩羅什訳で知られる『諸法無行經 (Sarvadharmāpravṛttinirdeśa)』といった、他文献における引用を除いて原典の知られていなかった大乘經典類の断簡も次々とその姿を現した。これらには北西型グプタ文字が用いられ、4世紀から5世紀に遡る写本であると推定されるが、こちらも驚くべき年代の写本である。

コレクション中、最も新しい写本は、7世紀から8世紀にかけてのギルギット・バーミヤン第1型、および同第2型文字による写本である。その中には第1型文字による『摩訶僧祇律 (Mahāsāṃghika Vinaya)』の樺皮写本断簡、さらに同じ書体による散文で因縁物語のついた『法句經 (Dharmapada)』の断簡も見い出された。さらに『法華經 (Saddharmapuṇḍarīka)』、『金剛般若經 (Vajracchedikā Prajñāpāramitā)』、『薬師經 (Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabhārāja)』、『月上女經 (Chandrottaraḍārikāvyaākaraṇa)』、『宝星陀羅尼經 (Ratnaketuparivarta)』などが認められた。

しかしこれらもコレクション全体から見れば、ほんの数パーセントにすぎない。クシャーナ文字写本など、あまりにも時代的に古い写本が多く含まれるため、漢訳あるいはチベット語訳に対応文献の存しないこと、また文面から阿含、律、阿毘達磨の三蔵文献の断簡も数多く認められるが、その中にはすでに失われた教団文献が数多く含まれていると推定され、その正体を突き止めるのは容易ではない。なおコレクションには1点だけバクトリア語の皮革文書断簡が含まれているが、これも仏教文献である。興味深いことに、種々のブツダ名が列挙されているが、それらは『無量寿經 (Larger Sukhāvativyūha)』

の冒頭部に現れる種々のブツダの名称とほぼ一致しているのである。

スコイエン氏のコレクションの重要性は、スタインやペリオ等の蒐集した中央アジア出土写本と異なり、直接的なインド文化圏、すなわちガンダーラより現れた初めての大規模仏教写本だという点である。同じようなものに上述のギルギット写本もあるが、こちらにはそれよりはるかに古い時代の写本が数多く含まれている。驚くべきことにカローシュティー貝葉写本断簡も『大般涅槃経』を含めて約200点が見い出された。これまでのカローシュティー資料は樺皮か木簡であって、貝葉写本の発見は世界初である。

現在我々のグループは、現地調査に加えてメンバーの属する研究機関で定期的に研究会を開きつつ出版に向けての準備を進めている。その第1巻は *Manuscripts in the Schøyen Collection I (Buddhist Manuscripts, Vol. I)* と題され、我々の依頼した各国の研究者の寄稿を得て、今年中にオスロより出版される予定である。その中には10点の写本断簡のローマ字転写テキスト、英訳、カラー写真等が含まれるが、その内容と寄稿者を紹介すれば以下の通りである。

1. Kuṣāṇa Fragments of the *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (L. Sander)
2. *Caṃgīsūtra* of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin (T. Brekke)
3. *Śrīmālādevīsīṅghanādanirdeśa* (K. Matsuda)
4. Mahāyāna Version of the *Pravāraṇāsūtra* (K. Matsuda)
5. *Sarvadharmāpravṛttinirdeśa* (J. Braarvig)
6. *Ajātaśatrukaukṛtyavinodanā* (J.-U. Hartmann & P. Harrison)
7. Fragments from the Aśoka Legend (K. Wille)
8. *Prātimokṣa-Vibhaṅga* of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin (S. Karashima)
9. Gāndhārī Version of the *Mahāpariṇirvāṇasūtra* in Kharoṣṭhī Script (M. Allon & R. Salomon)
10. Bactrian Buddhist Document (N. Sims-Williams)

上記中、トルケ・ブレッケ氏による *Caṃgīsūtra* とは、パーリ中部経典の第95経 (*Caṅkīsutta, MN 95*) に対応するものであるが、漢訳阿含には見い出されない経典である。3世紀ないし4世紀頃と推定される北東型グプタ文字で貝葉に書写され、ほぼ完全な数葉を含む複数の断簡が回収されている。この経典は、‘dharmanidhyānakṣānti’ という、唯識学派の文献を読む者にはよく知られた用語の現れる経典であるが、この語は断簡中にも数度確認できる。またクラウド・ヴィレー氏によるアショーカー王伝

説関連の断簡とは『ディヴァ・アヴァダーナ』に含まれるアショーカー王の登場するアヴァダーナ類の断簡をコレクション中より収集したものである。

### 3 説一切有部『長阿含』のギルギット写本

1997年11月、スコイエン・コレクションを最初に訪ねた帰途、ロンドンのディーラー、サム・フォッグにおいて筆者は、2週間前にパキスタンから届いたばかりという樺皮写本の束を目にした。一葉の大きさは縦10センチ、横50センチメートルほど。癒着した10数葉ずつの3束に分かれ、全部で50葉ほどはあった。各葉の両面に梵語で仏典が書写されていた。文字はギルギット・パーミヤン第2型。これは我が国に伝えられた悉曇文字の原型でもある。数枚の写真を撮った後、しばらく束の上下の数葉を読んでみると、北インドに栄えた説一切有部教団 (Sarvāstivādin) の伝える『長阿含 (*Dirgha-āgama*)』の一部であることが分かった。漢訳大蔵経に残る『長阿含』は法蔵部教団 (Dharmaguptaka) が伝えたものであり、説一切有部のそれは漢訳されていない。

帰国後、東京の日仏交易社 (現欧亜美術) の栗田功氏のもとに、同じ束の上部の一葉を写したサンプル写真がパキスタンより届いていることを知った。氏によると、これはアフガニスタンではなく、パキスタンの実効支配するギルギットの洞窟で蜂蜜ハンターが発見したらしい。東海大学の定方晟教授がその写真を見て一文を発表している (『大法輪』平成11年1月号)。その後、写本自体はスコイエン氏ではなく、ワシントンの匿名のコレクターに引き取られ、筆者の手の及ばない所に行ってしまったかに見えた。しかし幸運にも写本は米国ボルティモアのウォルターズ・アート・ギャラリーに依託保存され、その研究と出版は我々スコイエン・コレクションの研究グループに依頼されることになった。本年4月中旬、筆者の許にも保存処理の終わった写本の写真がギャラリーより届けられた。写真には48葉の樺皮写本と、付属する断片約100点が原寸大で撮影されていた。まだ詳しくは見えていないが、これら48葉は『長阿含』の後半部分のいずれかの箇所をカバーすると思われる。

さらにこれに先立つ3月初旬、再びオスロからの帰途、ロンドンの別のディーラー、マーク・アロン氏のギャラリーにおいて筆者は、同じ写本の別の部分に遭遇した。そこには癒着した10数葉の束5つ (80葉ないし100葉ほど) と、30センチ角の箱一杯に詰め込まれた多数の断簡が認められた。価格はアロン氏の手数料を入れて日本円にすると4000万円! とのことであった。その場で半時間ほど読み、さらに帰国後筆者が写してきた各束上下の

写真で確認したが、その中には『四衆経 (Catuspariṣatsūtra)』の中程 (Waldschmidt ed., § 27a) から最後まで、さらにそれに連続して『大本経 (Mahāvadānasūtra)』のほぼ全文が含まれていることが判明した。つまりこれは両経を含む有部 (あるいは根本有部) 『長阿含』の第1章「六経品 (Ṣaṣṣūtrikanipāta)」の、まさにその箇所であった。『四衆経』と『大本経』のヴァルドシュミット校訂本中の欠落したり復元不全な箇所も、今後これを見ればすべて判明するはずである。

もしギルギットで『長阿含』の完全な写本が発見されたのだとすれば、全体で500葉以上はあったはずである。いくつか分割されて売り飛ばされたのであろうか。では残りは一体どこに。それらが近日中にマーケットに現れる可能性は高いように思われる。なお、数日前のアーロン氏からの連絡では写本は売れたとのことであったが、購入者は知らされていない。いずれにしても、これは現存する唯一の貴重文献である。仏教研究にとってその価値は計り知れない。購入者が誰であれ、現在の、さらに未来の購入者によってそれらが研究者に公開されることを願わずにはおれない。

#### 付記

本稿は、3月25日のシンポジウムにおける発表のうち、スライドに先立つ口頭発表部分にその後の情報を一部追加してまとめたものである。なお筆者は、同内容の報告数編をすでに公にしているので参照していただきたい (『月刊しにか』1998年7月号、『東洋学術研究』38巻1号、『佛教大学総合研究所報』13, 15, 17号、『中外日報』2000年4月27日付)。

スコイエン・コレクションに対する本格的な研究は今始まったばかりであり、その全体を解読して写真とともに出版し、学界共有の財産とするには今後相当の時間と費用がかかるものと思われる。ノルウェー側では、本研究はノルウェー科学アカデミー高等研究所のプロジェクトとして採用されている。我が国から参加する筆者に「古典学の再構築」の公募研究の一つとして研究費をお認めいただいたことに御礼申し上げます。

(2000年4月30日)

## タミル古典研究の回顧と展望

高橋 孝信

東京大学大学院人文社会系研究科教授

恋愛や英雄行為を主題とした南インド・タミル古典 (紀元後1~3世紀) は、北インドの宗教思想 (仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教) の流入、そしてヒンドゥー教が支配的になるにつれ、その世俗性ゆえに軽視から蔑視へ、さらに敵視されるにいたり、やがてすっかり忘れ去られてしまう。一方、16世紀以降、西洋宣教師たちによって印刷術がもたらされ、教育も普及するようになる。さらに西洋の文物に接したインド知識人たちは己の文化やその起源について考えるようになっていた。こうした中で、まず18世紀末からドラヴィダ諸語の発見が始まり、タミル語がアーリヤ系の言語とは異なることが立証された。ついで19世紀末から忘れられていた古典が「再発見」され、それに描かれたタミル古代の文化は彼らが長い間親しんでいたヒンドゥー文化とはまるで異質の高度な文化であることを発見する。当時はまたイギリス統治下であって、全人口のわずか3パーセントほどに過ぎないバラモン (ヒンドゥー文化の代表者) が、政治や教育などの分野で主要ポストの約8割を独占し、彼らに対する反感が強まっていた。

こうした中で、古典の「再発見」はタミルナショナリズムを生むことになった。タミルナショナリズムは、一方で古典研究への熱意を生み出し、そのため今世紀30年代頃までの研究の中には今日でもなお価値を失わない良質なものが存在する。しかし、他方ではいたずらに過去を賛美するのみで、批判的合理的な研究とは呼び得ない学問傾向を生んだのも確かである。そして、このような流れから反バラモン、反サンスクリット運動が沸き起り今日に至っている。

一方、西洋のインド研究はそもそも植民地支配と密接に結びついていた。そのため、初期のインド研究は主に宣教師たちによって南インド (ことにタミル) の言語や文化に向けられていたが、やがてインド文化の基盤をなすヒンドゥー文化およびその中心的な役割を果たしている言語であるサンスクリット語の研究に移行して行く。インド独立後もこの傾向は変わらないが、植民地経営の要請としてのインド学でもあったから、欧州でのインド研究は80年代ごろから急速に縮小されている。

またこの間、学問の潮流は文献学から言語学・人類学